資料２

2019年度　佐賀県　唐津市立箬木小学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
自ら気づき考えて，動く子どもの育成	・汎用的な能力の育成を軸とした，主体的・対話的で深い学びの展開 ・たくましく生きるための健康や体力の育成 ・自己肯定感を育む教育環境の構築と支持的風土の醸成 ・地域人材の積極的な活用と，体験活動・表現活動の充実 ・組織力を生かした業務の改善と時間外勤務時間の縮減

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3　目標・評価

①汎用的な能力の育成を軸とした，主体的・対話的で深い学びの展開

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針	学校教育目標の周知	本年度の学校教育目標への児童，保護者の理解を高め，学校への協力に積極的な保護者の割合を85%以上にする。	・学校教育目標と教育活動，家庭生活へのつながりを示しながら，各種通信やホームページで発信をする。 ・各学級の教室や多目的室などの掲示による児童，保護者への周知をする。 ・育友会総会や評議員会で保護者に説明する。 ・全校集会等で定期的に振り返る。	A	・ホームページ定期的に更新し，そこで学校目標の啓発を図り効果が出ている。また全教室の前面に学校目標を掲示し，毎月の学校だよりにも，表題として表記しているので，学校目標の認知は保護者の90パーセント以上ができている。 ・授業参観や行事等への保護者参加も例年こえている。	・学校目標達成のための学校の取組について，育友会総会や評議員会等で説明を密に行い，保護者の理解を深め，学校目標実現を目指す。 ・授業参観等の保護者参観日の曜日を分散させることで，より保護者参加率を高め学校理解も深める。
教育活動	●学力向上	主体的・対話的で深い学びの継続と展開	・主体的に学習に取組み，自分の考えを深められ，広げたりできたと実感する児童を85%以上にする。	・主体的に学べるような課題設定や単元を構成する。児童自身が学びをメタ認知できるような振り返りの場を工夫し，よりアクションプランに沿った授業展開にできるようにする。 ・6年間の学び，9年間の を見据えて，意図的・系統的な指導を行う。 ・地域へ学びの成果を表現，発信する活動の充実を図る。	B	・アクションプランに沿った授業展開は定着しており，1つ1つの学習活動の質が向上した。 ・主体的な学びを支える教材開発に取り組むことができた。 ・日頃の学習の成果を他学年や地域に表現することで，更なる学習を図った。	・単元を通して児童の意欲が継続するような導入学習を位置づける。 ・教師の介入の仕方、思考を促す発問について研修を重ねる。 ・6年間の学び，9年間の を見据えて，意図的・系統的な継続的な指導を行う。
			記述力育成のための汎用的能力の明確化とその育成を図り，5，6年の学習状況調査の到達度を県平均以上にする。	・各学年，汎用的能力の育成のための単元について，言語操作と思考操作を明確に区別し，実践を通して単元構成の見直しを行う。 ・汎用的な力について整理し，各教科内と教科を貫くものを区別し，レインボータイムとの教科との関連や生かし方について明示したカリキュラム改善を行う。 ・「学びのCファイル」活用による個に応じた課題の工夫を行う。	B	・レインボータイムと教科を関連付けた単元構想や授業実践を行うことをもとに系統性を見直し、修正を図る。 ・条件つき記述の正答率が県平均に満たないものがあった。 ・算数の記述の様式を学習の正答例を分析して、共通理解を図ることができた。	・レインボータイムのカリキュラムを思考と言語に分けて整理したことをもとに系統性を見直し、修正を図る。 ・記述の精度を上げるために、記述の型の共通理解を図り、下学年からの積み上げを強化する。
			読書活動の推進をし、低学年は年間貸出し冊数を100冊以上、高学年は年間読書ページ数8000ページ以上にする。	・図書館を活用した授業の充実を図るとともに，読んだ本の紹介や推薦などの言語活動を通して読書の幅を広げるようにする。	B	・本を借りる、ポップを作る、紹介文を書くなど、図書館を活用した授業が定期的に行われていた。 ・読書目標を達成する児童が7割に満たない。	・個人の冊数にこだわらず学校全体での貸し出し冊数を目標にすることで、児童が意欲的に本に触れる機会を増やす。 ・ポップや帯などまを紹介する作品作りやビブリオバトルなどに授業で取り組んだり、図書館をまとした行事を開催する。
		【基礎・基本の定着及び学習習慣の確立】基礎基本を定着させ，日常的に予習・復習に取り組む力の育成	「ぐんぐんタイム」「復習タイム」の充実を図り，基礎基本を定着させ，全国学力・学習状況調査及びCRTで県平均以上にする。	・児童の実態を把握し，ねらいを焦点化し，それらに合わせた授業づくりを行い，段階的に取組をすすめていく。 ・漢字ドリル、計算ドリルなどを活用した基礎・基本の反復練習を実施する。	B	・ローマ字や都道府県など学年を問わずに定着が求められるものや漢字や計算などの積み重ねが求められるものなど、学年の実態に応じて取り入れることが出来た。 ・12月実施の調査では全ての学年で県平均以上を達成している。	・学年にとられない基礎・基本の定着が求められるものの共通理解を図り、実施していく。 ・6年間を見通した授業づくりを行うために、段階的なグループ活動の進め方や課題提示の仕方について、研修を重ねる。
			家庭学習の時間（学年の数×10分＋20分以上）を定着させ，学年相当の家庭学習達成率85%以上にする。	・予習を中心とした課題の工夫を行う。 ・読解・記述力を伸ばすために，週末課題の内容を工夫をする。 ・家庭学習の手引きの活用を促し，自学推進のためのメニューを示したり，展覧会，表彰を行ったりする。	B	・保護者に実施したアンケートによると，学校が家庭学習のために課題を工夫していると評価したのは4点中3.5と高い。 ・各学年の実態に応じた週末課題の作成に取り組んだことで基礎の定着を目指した課題が多かった。長期休業中は記述力を問う課題を入れることができた。	・児童自身も家庭学習の時間を自覚できるように、日々の連絡帳に学習時間を記入させるなどの工夫を図る。 ・日頃の宿題に読解・記述の問題を少しずつ入れることで、最終的な向上を目指す。
	○外国語教育の推進	外国語(英語）活動の推進及びコミュニケーション力の育成	新学習指導要領に対応したカリキュラムを編成し，英語に慣れ親しむことができたと言う児童を80%以上にする。	・英語にふれる場や環境を工夫する。 ・児童のALTとの積極的な交流の場を設定する。 ・ALT来校日は校内放送やあいさつ・ひと言を英語で行う。 ・高学年では、各教科の始業のあいさつを英語で行う。	B	・高学年は年間70時間、中学年は35時間の時間を確保し、新学習指導要領に沿って学習活動を行うことができた。また他校との交流活動を仕組み、児童の意欲の向上を図ることができた。 ・ALTの交代も給食や休み時間行事等でALTとの交流の場を積極的に設けていた。	・教師間で英語の授業を見せ合ったり、実践を紹介し合ったりして指導力の向上につながる研修を重ねる。 ・クラスルームEnglishを増やし、教師の語彙力向上に努める。

②たくましく生きるための健康や体力の育成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体つくり	日常的に健康・体力づくりに取組む力の育成	家庭と協力し，就寝，起床時間の固定化を進め，規則正しい生活習慣ができていると答える児童を85%以上にする。	・早寝・早起き・朝ごはんの徹底を図るために，元気チェックによる振り返りをする。 ・カリキュラムをもとに，食育、性教育，防煙教室，薬物乱用防止などの授業を実施する。	B	・毎週の元気チェックにより，朝食摂取や睡眠・早起きの意識づけができている。 ・校庭で実施している生活チェック調査では，家庭での生活習慣の見直しに役立っている。 ・カリキュラムに沿って，食育，性教育，防煙教室，薬物乱用防止などの授業を実施することで，児童が自ら健康を保とうとする意識が高まった。	・今後も元気チェックなどによる振り返りを図に，外遊びを奨励と整頓などその啓蒙により，家庭での生活習慣の改善を促す。 ・健康教育については専門家を講師として招聘し，効果的に活用することで，より充実を図っていく。児童が自ら健康維持・管理ができるよう意識を高めていきたい。
			昼休みの外遊びなど運動習慣を定着させ，「体を動かすことが好き」と答える児童を85%以上にする。	・体育委員会による外遊びの推進（チャレンジ遊びの種目の設定）をする。 ・運動検定カードの作成及び活用の推進(水泳・なわとび・持久走） ・体力テストの結果を活用し，チャレンジカードを手がかりに児童が自主的に体力向上を図るようにする。 ・運動場，体育館等運動環境の整備・改善を行う。	B	・体育委員会による全校遊びの取り組みや、マラソンカードの取り組みによって、外で元気に体を動かす児童が増えた。 ・体力テストの結果を各家庭に配布したが、それをもとにした体力向上の取り組みを行うことができなかった。	・体力テストの結果をもとにして、体力面で特に課題となっているところを把握する。 ・児童の体力向上のため、体育の学習の中で継続的に適切な運動や遊びを取り入れる。 ・引き続き、外遊びを推進するための取り組みを、体育委員会を中心として進めていく。

③自己肯定感を育む教育環境の構築と支持的風土の醸成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると答える児童を80%以上にする。	・各教科及び道徳，特別活動などすべての教育活動において，子ども一人一人のよさを認め，自己肯定感を高める取組を行う。 ・各教科等や学校行事等を通して，夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設ける。	B	・どの学年も地域学習に取り組み、地域の物や人と接し、学習することで郷土への誇りとあこがれを育み、地域貢献や将来の目標について意欲を持たせることが出来た。	・これまでの地域学習を継続しながら、道徳科でも総合的に学習することで自己肯定感を高めるとともに、すべての児童に夢や目標を持たせるようにする。 ・高学年を中心にキャリヤ教育の充実を図り、広い視野を持ち自分の活躍する場を考える児童の育成をする。
	●いじめの問題への対応	いじめの未然防止と早期発見・早期対応並びに再発防止	・いじめの未然防止と早期発見・早期対応並びに再発防止などの予防的生徒指導を行う。 ・お互いを認め合う支持的風土のある学級作りをし、学級が楽しいという児童を85%以上にする。	・いじめの早期発見のため月1回のいじめアンケートを実施する。 ・いじめを生まない集団作りのため、道徳や学級活動を中心とした授業の充実を図る。 ・いじめ防止対策委員会、いじめ防止対策22条委員会を設置し、いじめ発生への迅速な対応をする。	A	・今年度のいじめ認知件数は2件あったが、いじめの未然防止に向けた取組や思いやりの気持ちの醸成など予防的生徒指導により、いじめにつながりそうな案件を早期発見・解決することができた。 ・毎月のなかよしアンケートの実施により，全職員で全児童の生活の様子を把握し共有することで，全職員による支援体制ができた。	・現在，毎月実施しているなかよしアンケート，年間2回実施している保護者向けいじめアンケートに加え，教職員による観察，児童・保護者からの相談などについて，全職員で共有し，早期対応・早期解決に努める。 ・いじめの未然防止に向けた取組や思いやりの気持ちの醸成など予防的生徒指導について，なお一層の充実を図る。
	●心の教育	豊かな心(思いやり・礼儀・感謝）や人間関係力の育成	・進んで気持ちのよいあいさつをしができる児童を85%以上にする。 ・思いやりのある態度で友達と接することができる児童を85%以上にする。	・あいさつ＋ひと言、ほかほか言葉の推進をする。 ・人権集会や各学年の人権教室の実施により人権週間の充実を図る。 ・強化週間を設定して全学級で人権作文やポスター、標語などに取組み，意識向上を図る。 ・SCを積極的に活用し，各学年年1回以上グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングなどの実践を行う。 ・Q－Uテストの効果的な活用と講師招聘による研修会を実施する。 ・心に響く時，きらりコーナーなどの掲示による情操教育の充実を図る。	B	・場に応じたあいさつや心掛けるように繰り返し指導することで，改善が見られる。 ・全校集会での話や各クラスでの取り組みにより，乱暴な言葉遣いをする児童がいなくなった。 ・人権教室や道徳で「いじめ」や「差別」について学習を行った結果，お互いに認めあう心情を育むことができた。 ・SCによるGEE計画的に実施でき、児童の心の変定に役立てることができた。 ・Q-U研修会を実施し、学級作りや個に応じた支援に活かすことができた。	・Q－U学ストについては毎年，職員研修を行っているが，来年度は講師招聘による職員研修を実施するとともに、児童一人ひとりの経年調査を行うことで、児童理解を深める。 ・自己肯定感を高め、支持的風土づくりができるよう手立てを工夫する。 ・SCとの連携をとおり、それぞれの児童が人間関係を円滑に行えるような手立ての参考にする。 ・人権同和教育を年間カリキュラムに位置づけ，6年間の積み上げを意識した授業実践を行う。
			毎月の児童集会や高学年の委員会活動など，児童に主体的に企画、運営をさせることで、児童会活動に進んで協力する児童を85%以上にする。	・計画的に代表委員会を設定し，児童の思いを高め，より主体的に企画、運営する。 ・委員会活動や係活動の内容を工夫し，より良い学校，学級づくりを目指す。 ・児童会活動の掲示コーナーの設置し，取組の見える化を図る。	A	・集会活動や学校行事においては，担当の児童を中心に，企画・準備・実践など一連の活動を主体的に行えた。 ・委員会の新しい取り組みなど紹介したり，終わったら後に活動の様子を伝えたりする場の設定をし，「みんなの笑顔を創るため」の活動をしているという意識が高まり，より主体的に活動できるようになった。	・これまでの活動をもとに，さらに工夫を加え，児童が主体的に取り組めるように教職員の支援の充実を図るために，環境を整えていく。 ・委員会の発足ついては，極所や内容について検討をし，さらに充実を図っていく。 ・児童の実行委員会で取り組む行事については，教職員間の共通理解や分掌リなども，支援体制を整えていくことで，自ら進ん?参考えて動く児童の育成につなげていく。
			縦割り班での活動を、年間行事に設定し，縦割り班活動が楽しいと答える児童を80%以上にする。	・縦割り班遊びなど異学年交流を深める場を年10回設定する。 ・縦割り班掃除など異学年が教え合う場を設定する。 ・無言掃除をする重点週間を設定し，感謝の心を育む。	A	・年度を中心に全員で取り組めるよう6月第一週目に取り組みができた。班のリーダーへの指導・支援に向けて，担任と班担当職員の連携が図れた。 ・縦割り班遊びは，リーダーを中心に活球全員の充実が楽しんでいた。 ・縦割り班掃除では，上級生が手本となり，下級生に優やさにアドバイスする姿が見られた。	・引き続き，縦割り班遊び，掃除など異学年交流を深める場を設定し，より効果的に実施できるよう時期を検討する。 ・学習の発信の場として，異学年児童への発表を意識的に仕組むなどと工夫する。 ・ニコニコ集会などみんなが集まる場で，縦割り班を使った遊びの授業や発表の計画なども入れて，交流が進むような取り組みをする。
	○特別支援教育	個に応じた学ぶ力の育成	特別支援、教育相談、生徒指導が連携を図りながら、特別支援学級在籍の児童への教育の充実を図る。	・個別カリキュラム(個別の指導計画）を作成し，全職員で共通理解を図り支援する。 ・児童の将来を見据え，この時期にどのような力を身につけさせるかについて洗い出し，生活単元を中心に，各教科等と関連付けながら，児童の自立を目指す。また，学習の成果を実感できる発表会、交流会を実施する。	B	・夏休みの中に配慮を必要とする児童の個別の支援計画を作成し，全職員で共通理解を図り，支援をすることができた。 ・自分たちで音楽会を企画し，発表する場を設定したことで全校児童から評価してもらい達成感を味わうことが出来た。また学びのよさや自己の成長を実感することにつなげることができた。	・カリキュラムの改善をし，計画的に発表や交流の場を設定し，児童が計画から活動まで主体的に活動できるようにする。 ・児童の将来を見据え、この時期にどのような力を身につけさせるかについて洗い出し、生活単元を中心に、各教科等と関連付けながら、児童の自立を目指している。
			全職員で情報を共有し、通常学級における配慮を要する児童への教育を推進する。	・個別の支援計画を効果的に活用する。 ・校内教育支援委員会を年間計画に位置づけ計画的に実施する。 ・地域との連携により児童の困り感や支援の在り方について情報を得る。 ・夏季休業中における保育園、幼稚園訪問を実施し、配慮を要する園児についての情報収集を行う。 ・講師招聘による特別支援研修会を行う。	A	・定期的に教育支援委員会を開き支援を必要とする児童について個別指導や小グループの取り出し指導につなげることができた。 ・気になる児童については、保護者と連携をとり、個別の検査を行い、その児童に合った進路を考える機会を持つことができた。	・年間行事に教育支援委員会を位置づけ、計画的に実施できるようにする。 ・生活支援員や担任、級外との連携が十分図れるような生活支援連絡会議を設定し、個別の支援の充実を図る。 ・個別指導や取り出し指導の内容や方法を吟味し、計画的に積み上げることで、生きる力の育成につながるようにしていく。

④地域人材の積極的な活用と，体験活動・表現活動の充実

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策
学校運営	○地域連携	地域と連携を図りながら郷土を誇りに思う児童の健全育成	地域の人・もの・ことを活用した体験型学習を、全学年年間3回以上行う。	・厳木町教育フェスタを活用した体験活動の場を設定する。 ・生活科や総合的な学習等のカリキュラムへの位置づけを明確にして，効果的に実施する。 ・地域の方と学んだことを発信するとともに，学ぶよさを実感し、感謝の気持ちを伝える場として「地域ありがとう集会」を実施する。	A	・地域の方へのメール配信を広げることができた。地域の学校への協力体制を作ることが出来た。 ・全学年対面の上地域を活用した学習を実施することで，地域のよさを実感する児童の育成につなげた。 ・地域ありがとう集会では，地域について学ぶことと，地域の方に守られていること，たくさんの方とかかわることができたことなどについて発信し，よりつながりが深くなったと実感できる場になった。 ・幼保小中高連携の充実を図ることで幼保小、小小、小中のつながりを意識した取組につながった。特に1年生は、スタート期に滑らかな接続ができ、安心して学習や生活ができる環境を整えることができた。 ・小中接続については、互いに授業参観し合い、児童生徒の様子について情報交換ができた。より個に応じた指導・支援に向けて、充実を図っていく必要がある。 ・地域の応援団が増え、主体的に見守り活動や環境づくりに取り組んでもらえるようになった。 ・保護者や地域には、該意を持って対応することができた。また、学校評価でも地域との関わりについては90%以上の保護者がよいと評価しており、緊急メールでの情報発信も的確にできた。	・保護者のみでなく、区長や見守り隊、老人会などにもメール配信できるようにし、緊急時対応の組織を構築する。 ・各学年の校外学習の見直しを行うとともに、年間計画を作成する。また地域の人やものを効果的に活用し、6年間を通して効率的な地域学習ができるようにさせる。 ・危機管理として、地域を巻き込んだ避難訓練を実施することで、危機対応能力を高めたい。
			幼保小中高連携として、どの学年も交流授業を1回以上実施する。	・幼保小中合同保健委員会を年1回実施し，課題を共有し，解決に向けて情報交換を行う。 ・幼保小中連絡協議会全体会を年3回実施し，連携強化を図る。 ・授業交流会を実施（小中・幼小）し，特に特別支援の視点で児童生徒の抱える困り感や困り感を軽減するための支援の在り方について，共通理解を図る場として効果的に活用する。			
			地域見守りの充実及び学習ボランティアの効果的な活用をする。	・児童・民生委員会と連携し，見守り強化を図る。 ・学習ボランティア人材バンクの充実を図り，年間計画に位置づけて効果的に活用する。 ・取組や活動の様子を紹介する校内掲示コーナーを更新し，児童が地域の方とのかかわりを実感できるように工夫する。 ・学校だより，学級通信，ホームページなどで紹介し，地域で学ぶよさを発信する。			

⑤組織力を生かした業務の改善と時間外勤務時間の縮減

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策
職員	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	教職員の時間外勤務の縮減	・適正な校務分掌の分担を行い、全職員の月平均時間外勤務の時間を30時間以下にする。	・定時退勤推進日等の設定や積極的な休暇取得の推奨などによって、長時間労働の縮減・解消を図る。 ・教材等の共有や校務の情報化による業務の効率化を図る。 ・教職員の勤務時間を確実に把握するとともに、特定の教職員に業務が集中しないようにマネジメントを行う。	A	・週1日の定時退勤推進日の定着により，メリハリのある業務の実施につなげた。また各校務分掌のファイルを職員室のファイル棚に整理するとともに、要綱やデータ化、データの共有化などで業務改善につなげることができた。 ・引き続き強られた時間に、優先順位を考え効率的に職務遂行ができるように指導助言しながら、意識改革を進めていく必要がある。	・年年度以上に行事の精選を行い、業務の縮減を目指す。 ・会議で話し合う必要があるものと、連絡のみで済むものの区別をし、事前に資料配布を行うこと、部会と連動した資料に基づく授業による協議の集会化を図ることで、時間を短縮し、会議の回数を縮減していく。 ・データの共有化を更に進め、業務時間の縮減を図る。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

○4月の6年生全国学力・学習状況調査と5年生の県の学習状況調査はどの教科も県平均を10ポイント以上上回ることができ、記述力の向上が見られる。しかし、12月の県調査では4，5，6年生全教科とも県平均を上回ってはいるが、理科の実験用具の使い方など技能において課題が見られ今後、その対策を充実させる必要がある。また、今年度も全教員が研究授業を実施し、講師招聘による授業研究会を実施したことで、思考力や汎用的能力の育成において成果を上げることが出来た。来年度は教育課程の研究指定であり、学力向上のためのカリキュラム作りを行い、汎用的能力の更なる育成に向けて取り組んでいく。そして、次期学習指導要領に対応し、目指す児童像の実現に向けた学校作りに努めていきたい。
○学校評価保護者アンケートでは25の質問項目のうち16項目で7月調査より評価が上がった。特に「学校目標達成の取組」，「児童が主体的に思考する授業の取り組み」については3．7ポイントと評価が高く、7月より上がっており，地域連携が深まり、郷土愛の育成につながっていると思われる。家庭での状況については，「家庭学習の取組」と「交通ルールを守る」の評価が上がっており，家庭との連携が進んでいると考えられる。「携帯，スマホ，ゲームの問題点についての啓発」については，昨年度から学校評価アンケートのポイントが低く，1学期に全児童に携帯スマホ，ゲームに関するアンケートを実施し，今年度も重点項目として取り組んでき た。11月1日に実施した「ノーゲーム・ノーテレビデーの取組」でも全校の68％の家庭で取り組んだということであった。徐々に改善してきているが，まだまだ改善できることがある。12月の教育講演会では，昨年に引き続き、嘉語聴覚士による携帯スマホ、ゲームによる睡眠障害や脳の発達など脳への影響についての講演を企画し、啓発を進めた。

●は共通評価項目、○は独自評価項目